

多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心なさい。立ちなさい。お呼びだ。」盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。
-マルコ 10 章-

見えるようになりたいのです

世界には「救い」を求める、あまたの声が上がっています。この世限りの我が身の安寧と富を求める声あれば、安らぎを見いだせず、神に無力さを投げ出す声もあります。そのすべての声がどのように天に届くのか？ ある啓示の中で主イエスが仰っておられるのは「祈りは、心がなければ私に届かない」です。

「心からの祈り」とはどんなものなのか？ 旧約聖書に、それと見いだせる祈りの中に「エステル」の祈り（続編エステル C12-30）があります。異国の支配者によって民族存亡の危機に追い込まれた王妃エステルの“あなたのほかに助け手を持たない、ただ一人である私を助けてください”という祈りであり、現代にも同じような、かつてルアンダ政府フツ族の他民族殲滅計画による、ツチ族大虐殺で生き残った少女、イマキュレーの祈りにそれを見ることが出来ます。彼女はトイレにかくまれて 3 か月間、ロザリオの祈りで恵みを得て解放後、家族を殺した囚人を「赦す」という心の平安を戴いた少女でした。



さて、今日の福音。盲人バルティマイのイエスとの出会いは、誰もが当たり前で得ているものを、彼は共有できないで暗黒の闇の中に葬られていた孤独な世界の中で『一条の光』が差し込んだ出来事でした。健常者世界に出ることが許されなかった障害者がおどりで叫んだ祈りは「ダビデの子よ、私を憐れんでください」でした。主イエスには、この祈りがこのように聞こえた事でしょう。「神に遣わされた貧者の保護者よ。私を可哀そうに思ってください」と。神は他に頼る者、助け手を持たないただ一人である人の祈りは聞き逃すことはない方なのです。盲人の祈りはイエスに届いたのです。そして彼はただ一言「見えるようになりたいのです」と願いました。

彼が望んだ「見える目」とは、私たち健常者が、罪を犯すために使う目ではなく、明らかに、神を賛美するための目でした。「神が見えるようになりたかった」のです。

かつて、韓国の貧しい施設を訪問したとき、中途失明で全盲の中年女性に出会いました。彼女は私にこんなことを話してくれました。「私は目が見えた若かった頃、オシャレを好み、好きなように楽しんできた娘でした。しかし見えなくなった今、本当に大切なものが見えるようになりました。」と。

見えるようになったバルティマイの目は、見えるイエスを見失うことなく、イエスに従う人になりました。